

信州大学における授業のピアレビューの試み

西垣順子

(信州大学教育システム研究開発センター)

1. 信州大学における授業のピアレビュー（教員による相互評価）導入の背景

信州大学には大学教育の研究開発担当部局である教育システム研究開発センター(以下、センターと略)が存在し、2002年4月に専任教員が着任して以降、授業のピアレビューの導入と推進に取り組んでいる。導入の背景としては、①FD 推進に関する学外からの圧力、②イギリスのSD (staff development) システムの紹介、③遠隔地にある学部との信頼関係構築の必要性の3つをあげることができる。

・ staff development システムについて

英国のSDシステムは主に appraisal system と呼ばれる教員評価制度と研修制度からなる。すべての教員は1年に1度、アプレイザル・シートに自分自身の実績を記入して学科長に提出する。アプレイザル・シートには上手いかなかったこと、援助を必要としていることを書くこともある。学科長は提出されたシートを読んで各教員と面談を行い、研修を受けさせるなどの措置をとったり、助言を与えたりする。このシステムにおいて重要なのは、学生ではなく教員が教育を評価するという点である。

信大においても学生による授業評価が3年前から実施されているが、授業の評価を学生のみ任せおくのは無責任である、教員に対するサポートがなければ無意味であるという考えがセンター内にはあり、SDシステムへの関心が高かった。

しかし、学科長などの役職にある教員が他の教員の教育を評価、助言するという制度を、日本にそのまま導入することは難しい。そのため、まずは教員同士で授業を相互に評価する制度として、授業のピアレビューを導入することにした。

・ 遠隔地キャンパスとセンターの関係

信州大学は5つのキャンパスを抱えている。隔地学部とも呼ばれる本部キャンパス以外の学部とはディスコミュニケーションが起こりがちであり、教育に関する新しい取り組みは本部キャンパスの横暴と見られることが実際に多い。そこで、センターの教員が公開授業を実施するという形で遠隔地学部まで「まな板の上に乗りに行く」ことで、センターと遠隔地学部の教員との間の信頼関係を築くきっかけができることを期待した。

2. 授業のピアレビューの導入過程と今後の展望

・ 導入年（2002年）の取り組みとその経過

前期1、後期4の5つの授業が参加した。授業は常に公開とし、2ヶ月に1回の検討会を開催するという計画通りに、前期は実施した。しかし、後期にこの計画は参加者の多忙のため、破綻状態になった。

また、この年にピアレビュー・プロジェクトが直面したのは、検討会の話題がいつも同じになるということであった。プロジェクト参加者が、学生からの評判の高い若手教員ばかりであったためか、検討会では授業の工夫を賞賛しあうことが多く、授業の評価や検討よりも、カリキュラムの不備などのより大きな問題点が話題になりがちであった。これら

は短期的に解決しないため、検討会の話題のマンネリ化につながったと考えられる。

・2003年の取り組みー参加授業の増加と遠隔地学部へ

参加授業が36に増加した。負担を軽くするように心がけ、授業は常時公開とするが、参観は義務づけないことにした。2ヶ月に1回程度の割合で、1つの授業をピックアップして、1時間程度の検討会を開催した。検討会開催が近づくと、対象となる授業を参観に行く教員もいるが、検討会のみに出席する教員もいた。検討会では、授業担当者が授業全体の流れと工夫について話した後に、ディスカッションを行った。現時点で検討会は3回実施。第1回は経済学部の200人超の講義で、多人数でも双方向の授業をする工夫について、主に検討した。第2回は教育学部1年生のゼミナールであった。1年生は松本にいますが教員は長野市にいるという状況で、学生を上手く組織して授業の下調べなどをさせる方法などについて紹介があった。

第3回は上田市にある繊維学部で、センターの教員が出かけて行って教養教育の授業を行った。専門科目ではないため、受講生が集まるか心配したが、約90人の登録があった。授業検討会では、工学系の科目と人文系では異なる（特に、理工系科目は高校からの積み上げが必要で、その積み上げができていない学生をどうするかが重大問題である）という反応が多かった。その一方で、授業のピアレビューに対する敷居は確実に低くなったようである。センターの教員にとって、遠隔地の学部が抱えている困難や課題、本部キャンパスとの間の誤解と相互不信の詳しい実態が見えたのは収穫であった。

3. 授業のピアレビュー導入によって見えてきた意義

2002年発生した問題は、2003年の制度変更でほぼ解消した。

①大学の教育改善に関する役割

次の3つの点から、教育改善の柱になりうるものが期待される。まず、授業について具体的な評価を得られることである。学生による評価の意義を否定するつもりはないが、そこから教育改善に役立つ情報を得るのは非常に困難である。教員による具体的なアドバイスや問題点の指摘により、授業担当者は次に何をすればいいかを考えられる。

次に、特にセンターの教員にとって、授業担当者が抱える教育支援ニーズを把握できるというメリットがある。特にセンター教員自身が授業をしに行くと、「あなたの授業はこうだったが、われわれの場合はこういうことで悩んでいる」という話を、多くの教員がしてくださる。これは今後SDプログラムを開発していく上で参考になる。

さらに、今後授業のピアレビューが全学的に制度化されれば、授業に対する第三者の目を授業担当者が気にせざるを得なくなる。日本の大学で、トップダウン的に統一された授業を実施するのは困難であるし、適切であるかも疑問である。他者の目を意識させることで、画一化に陥らないようにしながら、極端にいい加減な授業をなくしていくことが可能になる。

②ハラスメントの予防の役割

導入当初は想定していなかった役割であるが、授業が担当教員の独壇場ではなくなることによるハラスメント予防効果が期待されている。セクシャルハラスメントなど、加害者の認識不足を問題が大きくなる前に同僚が指摘することも可能になる。また、万が一、覚えのないことで学生からハラスメントであると訴えられた場合の備えにもなる。